

## 令和2年度 卒業研究（要約）

題目	リトアニアの歩みと今後の展望		
氏名	太田 雄基	(学籍番号 170781110)	指導教員 稲葉 千晴

### はじめに

2019年5月26日、大統領の決選投票が実施され、政治未経験の経済専門家が当選した。2020年10月25日、野党・中道右派の祖国同盟・キリスト教民主党が政権を取った。政府の感染対策や経済対策への批判が原因である。元祖は独立運動体サーユディスで右派・保守で、経済的に市場原理を尊重、価値観では伝統保守的・リトアニア民族主義的だ。本稿では、小国リトアニアの誕生から今後の展望について論じていく。

### 第1章 リトアニアのなりたちから独立まで

西欧と東欧の交差点であるリトアニアはドイツとロシアの間に位置し、東の隣国から2度占領された。リトアニア人とは、インド=ヨーロッパ語族独立語派バルト諸語の民族言語集団の末裔である。1386年、国王の結婚でポーランド=リトアニア連合国家が成立した。1569年、リトアニアとポーランド国王の「神聖なる結婚」を意味するル布林合同が起きた。1795～1917年のロシア帝国の支配下で、1918年初めにリトアニアは独立した。

### 第2章 ソ連支配下のリトアニアと再独立

1939年9月1日、第二次世界大戦が勃発した。1940年、ポーランドはソ連とドイツに分割占領された。同年夏、在カウナス領事の杉原千畝が「命のビザ」を発給し、6,000人以上のユダヤ人が安住地へ逃れた。1940年6月15日にソ連がリトアニアを占領した。1941年6月、独ソ戦が始まると、リトアニアはドイツに占領され、ホロコーストの嵐が吹き荒れた。1944年秋、ソ連がリトアニアを再占領した。第二次世界大戦を通して、多くのリトアニア人が戦争の犠牲となった。

### 第3章 再独立後のリトアニア

1980年代中旬、ミハイル・ゴルバチョフが改革政策を始めた。中央委員会に従順で地方に変化がなく、サーユディス(リトアニア語で運動の意)に発展した。スローガンは「開放、民主主義、主権」で、公用語と国旗を決めた。モロトフ=リッベントロップ協定50周年の1989年8月23日、「バルトの道」として、ヴィルニウスからタリンまで670kmを手で繋ぎ抗議活動を行った。1990年3月11日、リトアニア共和国が成立した。その後、原材料やエネルギー資源の価格が値上げされ、経済危機に陥った。

### 第4章 現代のリトアニア

1991年に国際連合に、1993年には欧州委員会に加盟した。2004年、NATO、EU加盟が実現した。2015年に自国通貨リタスからEUの共通通貨ユーロを導入した。リトアニアは国境を接しているため、1991年7月29日に国家間関係樹立に関する条約を結び、1992年10月初めに同国の国交を樹立した。バルト三国間で協力して西側との貿易拡大を目指した。エストニアやラトヴィアと水平的な枠組みで地域の独自性を目指した。

### 終章 今後の展望

EU加盟に関して2つの意見がある。第一はEUで自国の立場を表明し、安全保障や国際社会の地位を向上させるべきという意見だ。第二は、EU内での埋没やロシアからのエネルギー依存を脱却するため、自立した経済を作っていくべき意見だ。私は前者を支持する。経済的、社会的にEUの恩恵が大きく、各国と団結していくことが理想だと考えるからだ。各国と団結し、独立を果たした歴史が証明するように、自国だけではできないことが限られている。そのため、EU内での存在感を示し、EUとリトアニアが手を取り合っていくことが必要だと私は思う。